

私の
交遊録

苦しい時にこそ心の支えに。 互いの夢を果たす、友情の力。

撮影=福島 健一
取材・文=木戸 珠代



写真左より、本吉さん、小森さん。中学からの38年の付き合い。サッカーに汗した高校時代に仲を深めた。部内のスターだった本吉さんと対照的に、小森さんはベンチウォーマーだったとか。

小森 貴さん

【こもり・たかし】

1952年、金沢市生まれ。金沢大学医学部卒業。石川県立中央病院耳鼻咽喉科医長を経て、89年「小森耳鼻咽喉科医院」開業。石川県医師会理事、日本医師会未来医師会ビジョン委員長も務める。20余年に及ぶ舩倉島の診療活動が認められ、03年輪島市特別功労賞受賞。

患者の視点に立った、真摯な診療姿勢が、多くの人から厚い信頼を得る、開業医の小森貴さん。誰にも温かく接する、気さくな人柄が印象的だ。

中学では生徒会長を任せられ、グループの中心的存在だった小森さん。サッカーに熱中した高校生活を終え、父の志を受け継ぐことを決意。医学の道を目指し、大学を受験するもあえなく失敗。苦渋に満ちた浪人時代を共に乗り越えた同級生が、本吉達也羽咋市長である。二人は十六人の浪人生が暮らすアパートで、貧しい下宿生活を送った。「車もお金もなかった。特別な日にはカツ丼がご馳走でね。そんな苦しい現実から逃避して、いい医者になって人を助けたいとか、政治家として国民を救うんだなどと、二人で果てしない夢ばかりを熱く語ったものです」

努力と熱意の甲斐あって夢は叶った。現在、地元の未来のために、医療と行政の各々の現場に新風を吹き込もうと尽力する二人。「話す内容は昔とちっとも変わらないですね」と笑う。仕事で張り詰めた気分が楽になるだけではない。夢を追い、チャレンジする心があったため奮い立つ。良き友の存在がパワーの源になっているのである。

本吉 達也

【もとよし・たつや】
1952年、羽咋市生まれ。一橋大学法学部卒業。石川テレビ報道部で、報道記者として18年間勤務。96年、羽咋市長就任。以来、市民と行政が対等な立場で協力して進める、自立したまちづくりを目指している。